

遠隔地を結ぶ小大連携の取り組みについて（Ⅱ）

中川 泰（長崎大学教育学部）
松永 恵介（鳥栖市立鳥栖北小学校）
山川 昭大（諫早市立森山東小学校）

I. はじめに

ミラーシートと透明シートを用いた描画活動、題材「鏡の中に入ろう」の実践を再考することで、遠隔地を結ぶ小大連携の取り組みの可能性と課題を探ることが本研究の目的である。

題材「鏡の中に入ろう」の授業構想を担当したのは大学、授業実践を担当したのは小学校であった。当時、唐津市立馬渡小学校教諭であった松永は 2013 年 2 月に 4 年生 9 名を対象として計 4 時間の授業を実施している。

本題材は児童が失敗することなく創意工夫を重ねて描画活動を楽しめることを目指している。提示教材としては画用紙にミラーシートを貼って二つ折りにした“鏡の本”がある。実際の活動では片面に透明のプラスチック板（透明シート）を置き、その上にマーカーで絵を描かせる。そうすると、鏡に絵が映りこんで左右対称の形、思いがけない形が現れる。透明シートへの描画は紙や鏡面に直接描くよりも抵抗感が少なく、重ねると様々な絵の組み合わせができ、更に楽しい描画活動に発展することが期待できる。

導入段階での提示教材、教員を志す大学生による作品例が、児童の制作に対して大きな影響を与えていたことを観察した。児童が大学生による作品例を手にとる嬉しそうな姿が甦る。児童は制作への取りかかりも早く、電車の絵を描いて周りの景色が変わる作品や、模様の重なり合いを楽しむ作品など、工夫を凝らした作品づくりに取り組んでいったのである。作品を完成させた後は描いた絵を動かし、物語を組み立てながら他の児童との活発な鑑賞活動を展開していった。その結果から、児童は鏡よりも透明シートの特性に魅力を感じたと分析する。ただし、授業内容に合わせた適切な材料の選択は材料の特性を生かすことにつながっていたかについて疑問が残る。

II. 題材「鏡の中に入ろう」の実践内容

授業の計画を以下にまとめる。

時	主な学習活動	指導・支援	評価規準と方法
1	○活動の流れを知り、作品の構想を練る	○この活動がどのような活動なのか、どんな作品ができるのか、想像を膨らませる手立てとして、大学生が制作した作品例を見せる	関 材料の特性（ミラーシートやプラスチック板など）を考え、意欲的にそれを生かした作品をつくらうとしている（アイデアスケッチ）
2 3	○制作する	○ミラーシートやプラスチック板の特性を生かしているのか、児童の作品づくりを観察しながら声をかける	関 意欲的に制作に取り組んでいる（制作中の態度） 発 材料の特性（ミラーシートやプラスチック板など）を生かし、反射したり、連続したりする絵や模様を考えることができる（作品）
4	○仕上げをする ○友だちの作品を鑑賞する	○自分が考えていた仕上がりになっているかについて声をかけ、不十分な場合はどうすれば上手くいくのかを助言する ○児童に作品についての振り返りを書かせ、作品と振り返りを基に鑑賞活動を行う	技 アイデアスケッチのように、材料の特性（ミラーシートやプラスチック板など）を生かし、反射したり、連続したりする絵や模様を考えることができる（作品） 鑑 友だちの作品を鑑賞し、友だちの表し方の違いに気づき、表現の意図などを捉えることができる

1 時間目は児童に対して本題材の授業内容を伝え、大学生による作品例を鑑賞させ、どんな活動をするのかを理解させる。多くの作品例を鑑賞することで児童の制作意欲を高める。ミラーシートの特性（反射すること、折り曲げる角度によって模様が変わること）、プラスチック板（透明シート）の特性（透明なので何枚か重ねることによって動きのある構成を考えたり、物語を考えたりすることができる）についても指導する。児童は大学生の思いを受けとりつつ、自分の想像を膨らませてアイデアスケッチを描くことになる。

2・3 時間目はアイデアスケッチを基に制作する。初めに制作する時の注意点を伝え、次にミラーシートやプラスチック板の特性に注目させる。作品にそれが生かされるよう机間指導をする。特性が十分に生かされていない場合は作品例を再度鑑賞させながら、できる限りにおいて特性を取り入れるよう助言する。

4 時間目は最初に作品の仕上げを行い、この時間の最後に鑑賞活動を行うことを伝える。時間の途中、自分が納得いった作品ができているのか、工夫が実現されているかを児童に確認する。完成した作品について振り返りを記述し、他の児童の作品と振り返りを基に鑑賞活動を実施する。

今回の実践を終えての成果は以下の2点にまとめることができる。

- ①大学生による作品例が児童に大きな影響を及ぼした
- ②児童はプラスチック板を重ねることで、作品制作の魅力を感じたり、作品の連続性や物語性を考えたりしながら楽しむことができた

まず、①であるが、本実践を行ったのは佐賀県最大の離島にある小学校であり、男子8名、女子1名、計9名から成り立っている少人数のクラスである。図画工作科の授業でアイデアスケッチを描く際も、児童はよく前後の児童と相談をしたり、友だちの良いところを取り入れたりしている。なかなかアイデアが思いつかず、しばらく手が止まっている児童もいる。アイデアの幅が広がらないので、教員はこれまでの赴任校より多くの作品例を準備するとのことである。そういった児童に大学生による作品例を数多く提示することはとても有意義であり、児童の作品制作に大きな影響を与えている。児童は楽しそうに何度も何度も大学生の作品例を鑑賞する。授業の導入時に今回のように作品例が準備される機会はあまりないので、児童は目を輝かせながら、作品を閉じたり開いたり、プラスチック板を重ね合わせたりする。松永は「いつもより児童の作品の幅が広いと感じた」「制作への取りかかりも全体的に早かったように感じた」と指摘している。

次に、②であるが、大学生の作品例の中にそういった傾向の作品が多かったこともあるが、児童は自分の写真を撮って周りの景色がいろいろ変わる作品をつくったり、電車が多くの駅や町に旅をするような作品をつくったり、プラスチック板に描いた模様が重なり合い、その模様を楽しんだりするような作品をつくったりしている。制作した後にプラスチック板を様々に組み合わせることで、できた模様を楽しめることも魅力である。本題材の「鏡の中に入ろう」の折りたたんだ紙の中で繰り広げられる作品の世界を児童はとても楽しむことができたのである。

最後に、今回の実践を終えての課題が「ミラーシートの特性をもっと生かせるのではないか」ということにあると記述する。授業構想のコンセプトにはミラーシートの特性である“模様が反射する”ということを経験として作品に生かすという意図があったが、実際の児童作品にはミラーシートの特性を生かすことができていなかったのである。折りたたむことができるミラーシートは2面あり、1面が反射をさせるため、もう1面が描いたプラスチック板を設置させるためのものである。ミラーシートを90°に折り曲げた場合、制作したプラスチック板が左右対称に映るようになっている。結果的に左右対称に映ることを計算しての作品がな

かった。また、折りたたむミラーシートの角度を変えることで、変化する模様を楽しむような児童作品もなかった。

大学生の作品例にはミラーシートの特性である「模様が反射する」ということを生かした作品があったので、そこに注目させようと授業者が児童に指導を試みたが、児童はプラスチック板を重ねていく魅力の方にひかれたようである。児童作品を概観すると、一番背面になるのはミラーシートになっている。それはミラーシートでなくても良いのである。物語性を考えた場合、背景が同じ銀色に見えてしまうのも残念である。

“ミラーシートの使い方”にも特性をうまく生かせなかった原因がある。現在、教材として市販されているミラーボックスは箱になっていて、向かい合うミラーシートの中に模様や絵を描きこむようになっていて、ミラーシートを向かい合わせると、無限に広がる鏡の世界を体験できる。ミラーシートの使い方によっては万華鏡のように用いることもできる。使用方法については目的に応じて、更なる教材研究が必要である。

題材及び参考作品について検討し直すと、大学生が参考作品を提供することは児童にとって「自分もこんなきれいなものをつくりたい」「私もやってみたい」と思わせるに十分な効果があったと考えられる。教育現場では題材ごとに十分な量の参考作品があるとは言えないし、教科書や資料の平面では伝わらない魅力もあるからである。一方、大学生が題材の目的や、材料の良さを十分に理解していないと、授業の意図とは違ったことを児童に伝えるというリスクが発生する。

「鏡の中に入ろう」という題材名からも明らかなように、主役は鏡であって、題材の良さも反射や鏡の中に映った不思議な世界であるべきだろう。そうであるならば、参考作品も鏡を使うことの良さや面白さが伝わるものが適している。制作途中のものをあえて参考作品として提示することで、「やってみたいけれども、私にはできない」から「大学生の参考作品のおかげでつくることができた」「参考作品に自分のアイデアをつけ足して、もっと面白いものができた」へと変わる可能性がある。

Ⅲ. 小大連携について

参考作品が十分に用意できない教育現場、殊に島嶼や僻地にある小規模校において、大学生が準備する参考作品は授業の中で教員や児童の大きな助けになる。図画工作科にあまり熱心でない教員にとっても、図画工作科に積極的に関わる教員にとっても、参考作品があることで、指導がし易くなる。そして何よりも児童にとって、魅力的な参考作品は制作への大きな興味や関心を引き起こすし、構想の基にもなる。また、教員を目指す大学生にとっては題材や材料への深い知識や素養を得る機会になるし、どうすれば児童に題材の良さや面白さが伝わるかという、児童への“ものの伝え方”を学ぶ機会にもなる。今後、様々な学年で題材の

参考作品づくりや、現場の教員との関わり（現場からの指導、意見交換）を継続することで、図画工作科や児童への深い理解を得ることになり、教育現場への貢献にもつながることが期待できる。

山川は交流した僻地校と実際に勤務した小規模校での実態を踏まえて、以下の3点を指摘している。

- ①僻地・小規模校での図画工作科でありがちな問題
- ②問題を乗り越えるための方策
- ③外部のパートナーと協力することの魅力

①にある問題であるが、まず、児童数が少ないので、鑑賞（児童相互の鑑賞）の時に、自分の作品づくりに生かせるような作品が単純に少ない。例えば、作品づくりの途中に他の児童と作品を見せ合って、自分の作品づくりに生かせるようなアイデアに出会ったり、作り方のコツを得たりすることが難しいのである。次に、絵画などの題材では毎回同じような対象を描くことが多い。例えば、漁師町だと港に停泊している漁船を描いたり、周辺部の学校では学校の近くに昔からある神社を描いたりすることが多い。最後に、外部との交流の少なさである。例えば、せっかく作品をつくり上げても、教室に掲示するだけで、それを鑑賞してくれる人も数少ない。つまり、児童は自分の作品を見てもらい、その感想を受けとれない状況に置かれている。

②にある方策であるが、僻地・小規模校であることを逆手にとるということである。短所と捉えがちな問題は教員が少し発想の転換を図れば、いくらでも長所やオリジナリティにつながる。例えば、少人数であるがために児童相互の鑑賞が難しいのであれば、教員が参考作品を多数用意すれば良いのである。絵画の題材ではそこにしかないものを描いても、描いている本人がその素晴らしさや面白さに気づいていない場合が多々ある。そこにしかないからこそ自分の学校と地域の良さとして外部に発信することで、他者からの反応を受け、そこで改めて題材の面白さや学校と地域の良さに気づくことができる。

作品を披露する機会の少なさはインターネットで解決できる。例えば、児童の作品を披露する美術館的なサイトやブログをつくり、そこで作品を披露すれば、世界中の閲覧者からの反応を知ることができ、作品づくりへのモチベーションを上げたり、作品をつくり終えてからの充足感を満たしたりすることができる。様々なアドバイスを世界中からももらえるかもしれない。ただし、これらのことを一人の担任ができるだろうか。図画工作科に非常に熱心な教員でない限り、ここまでの取り組みは難しいと言わざるを得ない。小学校の場合、他教科の授業の準備、校務分掌事務、日々の学級経営、保護者とのやりとり、成績事務処理等々、図画工作科の授業以外にやらねばならないことが山積している。それを解決するためには外部にパートナーをつくる必要がある。

③にある魅力であるが、図画工作科で担任の有する力以上のものを発揮し、児童へ還元するためには外部のパートナーが大きな役割を担う。その候補が教員を目指す大学生である。参考作品を教育学部の学生の協力があれば、児童は多くのアイデアやヒントに出会う機会が保障される。一方、大学生は「どういう段階でつまづくのだろうか」「これを見れば、理解し易くなるかな」などと、児童のことを考えて参考作品をつくるのが、教員として活躍する際に役立つのである。

絵画の地域題材などもそこに住んでいる人よりも、地域の外に住んでいる人からの外部の目というフィルターで見ると、違う魅力や面白い題材に気づくことができる。その地域でしか見かけない材料も外部の目で発見され、地域ならではの材料を用いて工作することなども面白いであろう。

作品を披露するためのサイトやブログづくりも、現場の教員よりも、SNSなどに明るい、若い大学生世代の方が面白い発想で取り組むことができるであろう。感想をアンケートで集計したり、テーマを決めて作品を募集したり、独自のコンクールを開催したりすることも考えられる。教員を志す大学生にとっては児童の実態や生の反応を知り、授業準備を経験する良い機会になる。また、現場の教員にとっては図画工作科の授業をより充実できるだけでなく、若い大学生世代の発想を学ぶ機会となる。更に、児童にとっては今まで以上に楽しく充実した図画工作科の学びが可能になる。

小大連携をきっかけに、教員同士のネットワークをつくり、仕事を分担して取り組めば参考作品やサイトづくりも不可能ではない。ただ、リーダーシップをとる教員の負担増が予想されるし、図画工作科に熱心な教員のみが参加するという事態が危惧される。理想は図画工作科に熱心でない教員が抱える児童も、担任や学校が外部のパートナーと連携することによって、今までよりも楽しく充実した図画工作科の学びができる状態である。それを実現するには大学生のポテンシャルに期待するしかない。

3年前に題材「鏡の中に入ろう」の実践を担当した松永は、当時を振り返って小大連携で得られた三つのメリットを以下のように記述している。

○児童にとって小大連携で得られたメリット

「年齢が近い大学生との交流に児童がとても喜んでいて、これを指摘する。大学生が小学校へ交流にやって来ると言うだけで、児童は喜ぶのである。児童養護施設を抱える馬渡島には家族と離れて生活している児童もいる。その施設から小学校に通学する児童は特に大人との関わりをとても喜ぶ。島生まれの児童も、児童養護施設で過ごす児童も、若い大学生と一緒に遊んだり、給食を食べたりととても嬉しそうに過ごすことができたのである。そういった非日常の活動そのものが児童にとって、とても新鮮で刺激的であったのであろう。良い経験になったのではなかろうか。

更に、「たくさんの参考作品に触れることができること」を指摘する。僻地の児童が似たような作風の作品に偏ってしまうというわけではないが、どうしても児童が少ない僻地の学校では、変わった発想でつくられるものが少ない。「鏡の世界に入ろう」ではたくさんの大学生の参考作品を提供してもらったのである。児童にとっては多くの大学生が制作した凝った様々な作品と出会うことは何よりも得難い経験になる。作品と出会い、児童から大きな歓声が上がリ、その後の創作意欲につなげることができたのである。大学生の作品の影響が強く反映されていた作品があったわけではないが、多くの参考作品に出会えたことは児童にとって大きなメリットである。

○保護者にとって小大連携で得られたメリット

「大学生と関わる貴重な体験を我が子にさせることができること」を指摘する。島では手厚い少人数指導によって優秀な児童も育てている。高校から本土の進学校に行き大学進学を果たしたり、卒業して全寮制の高等専門学校へ進学したりする先輩がいる。ただし、その一方で「漁業を継いで欲しい」という親の希望が強い状況にある。大学への進学は島を離れることにつながるため、他との交流を快く思わない保護者がいるのも事実である。

更に、「島ではないところと交流する楽しみができること」を指摘する。島ではない他の場所で何かイベントがあると、島の住民は親子兄弟姉妹で一致団結して参加する。長崎県立美術館で「大きな紙芝居 [註 1] [註 2]」が上演される時には、かなり前から楽しみにされていたこともあり、家族総出で遠隔地にある長崎県美術館まで足を運び鑑賞していただくことができたのである。自分の子どもたちの作品が制作と上演で長崎大学の大学生と大学院生からサポートを受け、島ではない他の特別な場所で発表されることは、保護者にとっても貴重な体験になったと考えられる。

○教員にとって小大連携で得られたメリット

「大学生や大学院生から得られるアイデアがあること」を指摘する。教育現場で児童と向き合いながら、大学生や大学院生から様々なことを学ばせてもらった。最新の情報や、荒削りながら教育現場ではありえない大学生や大学院生のアイデアがあり、そこから得られることは少なくない。小大連携は教員自らが大きな成長を遂げる可能性をも秘めている。

更に、「教材をつくらなくても良いこと」を指摘する。図画工作科や美術科の授業を展開する際には、できる限り児童や生徒に対して参考作品を準備しなければならないと考えている。小大連携で大学側の厚意を受け、参考作品を数多く提供していただくことができたのである。参考作品をつくるのが好きだったり、得意だったりする教員ばかりが教育現場にいるわけではない。残念ながら、参考作品をつくることに抵抗を感じる教員も多い。そういった教員にとっては特に、授業をする際に参考作品を大学生や大学院生が準備してくれることはありがたいことであろう。

松永は「今後、小大連携を展開する時に配慮すべきこと、大学への要望など（図画工作科以外を含む）」について、以下の内容を語っている。

私が勤務していた離島の学校は小中学校で、小学校と中学校が連携している。今はそういった小中学校が一体となった学校が僻地や離島では多いのではないだろうか。そういった学校では、中学校の教員が小学校の授業に参加して、より専門的な教育を児童に受けさせることができるのがメリットとなっている。そのため、国語科・算数科（数学科）・社会科・理科では、先を見通した教育が計画的になされている。外国語活動（英語科）も然りである。大学との交流が大きな成果をもたらすのは、図画工作科（美術科）は勿論、体育科や音楽科といった実技科目ではないかと実感している。

外部との交流は児童や生徒の成長にとって、とても貴重な経験となる。特に図画工作科や美術科で多くの作品と出会うことは、自分の引き出しを増やすことであり、次への創作意欲につながる。「こんな絵を描いてみたいな」「こんな作品がくれたらな」と児童や生徒に思わせ、制作の意欲をもたせたい。自分が離島に勤務した最初の年、中学校3年生の美術科の授業を担当した時に、アイデアがなかなか浮かばず最後まで手が動かなかった生徒がいた。その年は小学校5年生から中学校3年生までの図画工作科と美術科を担当したのである。できるだけ多くの作品に触れさせてあげようと努力した。

たまたまその年に中学校の音楽科や体育科の教員が同じような考えをもっていて、様々な考えと出会えるように努力したり、様々な経験ができるような機会をつくったりしていた。音楽科では唐津市で行われる音楽祭に参加したり、体育科では島外の大会に部活を超えて参加したり、といった活動が経験できるようになっていたのである。そういった経験を経て、島の児童や生徒は島でない他の場で発表することに対して抵抗をあまり感じなくなっていたように思われる。

島での教員生活は3年間であったが、最後の年も最初の年と同じように小学校5年生から中学校3年生までの図画工作科と美術科を担当することになった。最後の年は最初の年のようにアイデアが浮かばないような児童や生徒はおらず、自由に表現することを楽しんで、絵を描いたり、ものをつくったりしていたことが心に残っている。何度かの経験ではなく、継続した長期的な計画をもって児童や生徒と関わるのが大切である。そうすることで、児童や生徒が大きく変わることを島での教員生活から学ぶことができたと考えている。

大学への要望については、「継続的な関係が築けたら、島の子どもにとって幸いだ」とのコメントがある。「今回のような実践は佐賀県の北部にある馬渡島と長崎大学という距離の遠さがあり、自分が転勤した後、継続的な関係を形成していくのは難しい…。今後、離島にある小学校と大学とが連携していくことを構想するならば、長期的な関係が築かれることを切に願う」とも記述している。

島の子どもは一度心を許すと、その人をととても信頼するし、関係が長く持続する。次の機会がなかなか訪れないからこそ、その人と再び会えることをとても心待ちにしている。一度会った関係なら、今はネット環境も進んでいるので、テレビ電話やチャット、画像配信など、そういった関わり方もできるのかもしれない。

松永は3年間の離島生活で学んだこととして、「見通しをもって、計画的に授業を進めることができるようになったこと」と「自分自身を見つめる時間をもつことができるようになったこと」を指摘している。

前者について、島には様々な生活用品を売っている商店がいくつかあるだけなので、授業に必要なものがあれば前もって用意しなければならない。島外にでる機会が週末しかない。次の日に欲しいと思ってもすぐには準備できないので、何事も計画準備がとても重要で、一週間または一カ月先を見通した計画が必要となる。これまで前日の授業準備が基本だった自分は、島の教員生活を通してかなり見通しをもって計画を立てることを覚えたとのことである。

後者について、常勤講師の時代、正規採用になってからの時代は、校務分掌が増える一方で余裕がなく仕事に振り回されていたと回想している。ほとんどの教員がそうであろう。体調を崩したり、心のバランスを失ったり、命をとられる教員もいる。島では帰りに寄り道をする店もなく自分の時間を多くつくることができる。ある程度の経験を積んだ教員であれば、自分の短所や長所を自覚しているので、余裕ができた時間で自分の苦手なところを解消したり、得意なことに磨きをかけたりすることができるとのことである。勿論、趣味の時間に割くことで、教員としての多くの資質を深めることにつなげることもできるであろう。

IV. まとめ

松永は馬渡島を離れてほぼ3年が経過した今、「離島勤務の時につくっておいた教材を利用することにより、現在の仕事が軽減されている」と振り返っている。離島では児童が少ないので、宿題を見る時間やテストの丸つけなど、普段の学級担任としてしなければならない仕事が、一般の学級担任時と比べて少ない。そのため、教材研究にかなりの時間を割くことができる。島への赴任が決定してから「絶対この島で過ごす何年かを無駄にしない」と決意したとのこと。島の教員としての3年で「個別対応を大切にする姿勢が身についたこと」を学んだとのこと。多くの児童や生徒を相手にしていると、普段の授業や活動の中でなかなか個を見る余裕はない。しかし、個を尊ぶ視点や意識は重要である。

松永に「再度、島で教育実践ができるなら、何をしたいか」という問いを投げかけたところ、以下のように回答している。

基本的に本土で行う実践と離島で行う実践に大きな差はない。いつでも目の前にいる子どもたちに最善のことをしてあげたいと思っているので、特に

離島でやりたい教育実践が今あるわけではない。離島では何かをするにしても時間をかけることができたので、本土でできないことを子どもたちに経験させてやろうと思って、何事も大げさに、力を入れて実践をしていた。そういった点では、離島にいる時しか、そういった実践は考えられないのではないだろうか。

彼は更に続けて、「後輩へのメッセージ」として以下のように語ってくれたのである。

島の方は基本的に内向的で、他人に心を許すまで時間を要します。自分も島の方と心を通わせることができたかという、うまく返答はできません。ですが、普通の学校では経験できない貴重な経験が、そして子どもたちとのとても素敵な出会いが待っています。島での生活はとても大変で、人によって向きや不向きがあると思います。また、家族と一緒に離島で生活をするのか、一人で生活をするのかによって微妙に違いがあるかと思っています。私は家族と一緒に離島に行きました。自分は島に行く時から「絶対この島で過ごす何年かを無駄にしない」と思って過ごしてきたので、とても多くのことを経験させてもらって、とても有意義な3年間を過ごすことができました。離島での3年間が私を大きく変え、今の自分があるのは離島での生活があったからだと信じています。「教育の原点が離島教育にある」と言われています。それは離島で教鞭を振るった教員にしか理解できません。チャンスがあれば、行ってみてください！

松永が島の教員生活の中で獲得してきたものに、“遠隔地を結ぶ小大連携の取り組みの可能性と課題が何であるか”についての答えが隠されている。可能性は“余裕のある時間を活用しての教材研究”と“個別対応を大切にする姿勢”において、現職教員を支援できること、教員を目指す大学生と大学院生に最良の学びの場を提供できることである。課題はいかに継続させていくかである。

最後に、松永が馬渡島で教員生活を過ごした3年間（2010年4月～2013年3月）に中川研究室は彼の赴任校がある馬渡島で4度の交流、長崎県美術館で2度の交流、修学旅行で島の子どもが長崎を訪問した時にも交流したことを付記する。

[註]

- 1) 中川泰・山川昭大・松永恵介・大野麻里子・昆正子・宮崎友理子「小大連携による紙芝居制作の試み(3)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第10号, 2011年, pp.79-88.
- 2) 中川泰・松永恵介・岩端佳奈・大野麻里子「小大連携による紙芝居制作の試み(4)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第11号, 2012年, pp.195-204.